

## はじめに

昨秋県都岐阜市のある近郊町に行ったさい、その町の図書館に案内していただく機会があった。人口2万人余の、昔は県庁舎も置かれ交通の要所をなしていた、いわば県下でももっとも由緒ある伝統町の一つが、どの程度の図書館をもっているかは、町と地域の文化水準を示す有力なバロメーターだろうとの思いもあってのことだった。しかし、案の上というべきか、けっこう大きな文化会館の一角を占めるにすぎない図書館の閲覧室の机はごく少なく、また書庫に並べられている本も全国どこにでもあるような子供向けばかりのような感じの本で、町や県や郷里の人物、文化、歴史、経済、政治について、深くて十分な検討にもとづいて書かれたようなものは、若干の町誌類のものを除いて、ほとんど見当たらなかったように思えた。伝統あるこの町にしてすら、失礼ながらこの程度だから、全国多くの町村も余り変わることはないだろう。長い歴史と文化を誇る日本のことだから、研究学術機関だけでなく、一つ一つの地域にも蓄積され、子孫はもとより、外来者、外国人にも見てもらい、伝えていかねばならない書物は、広い書庫いっぱい埋め尽くされている、というようにしていかなければならないはずである。こうなつてこそ、「経済大国」のみならず、「政治、文化大国」、要するに真の意味での「大国」というにふさわしいのでなかろうか。なお本号では、昨年12月に、本学で開催した地方分権についての山田公平先生（名古屋大学教授）の講演を掲載することにした。

1994年1月上旬

岐阜経済大学地域経済研究所

所長 柿本国弘